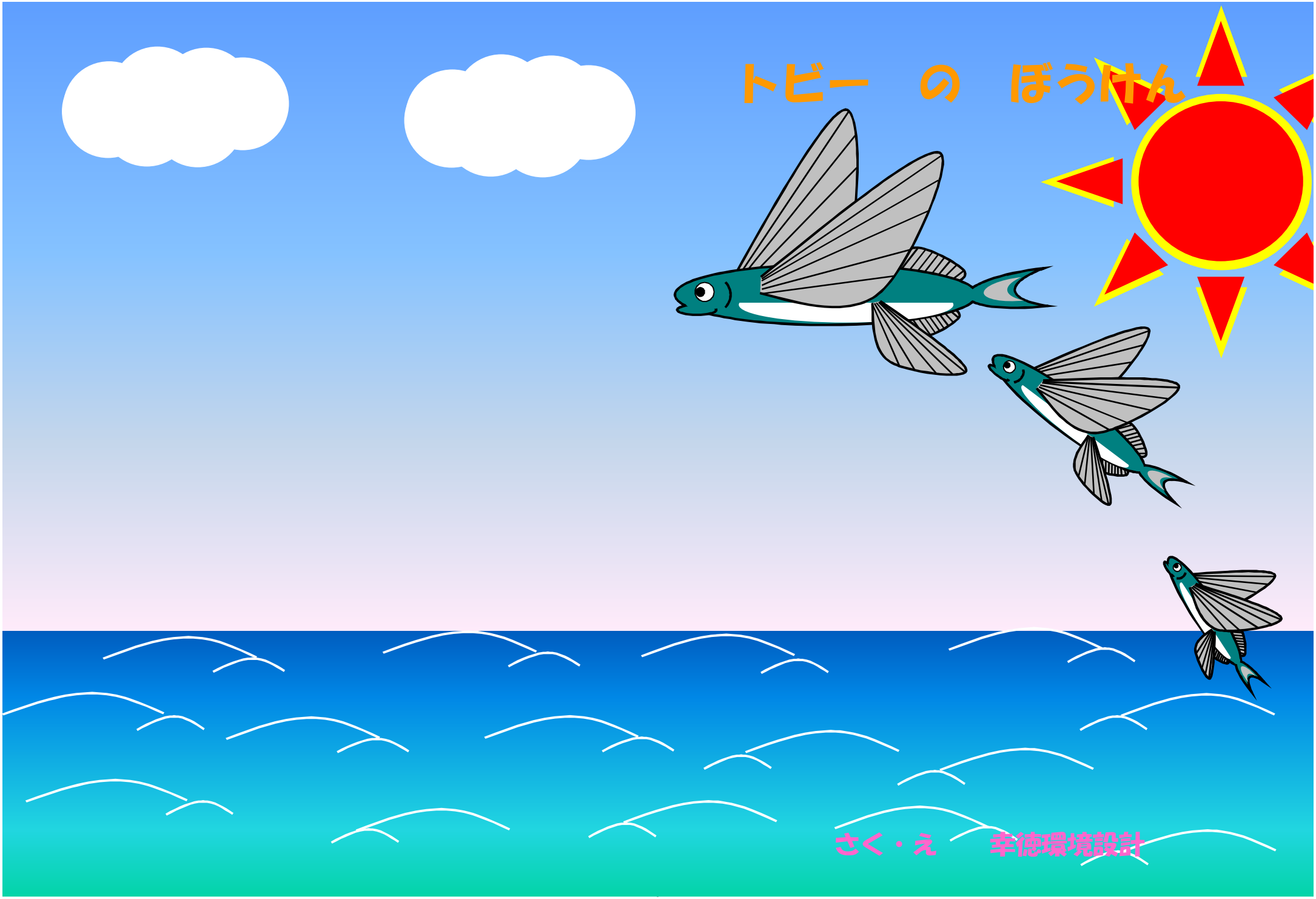
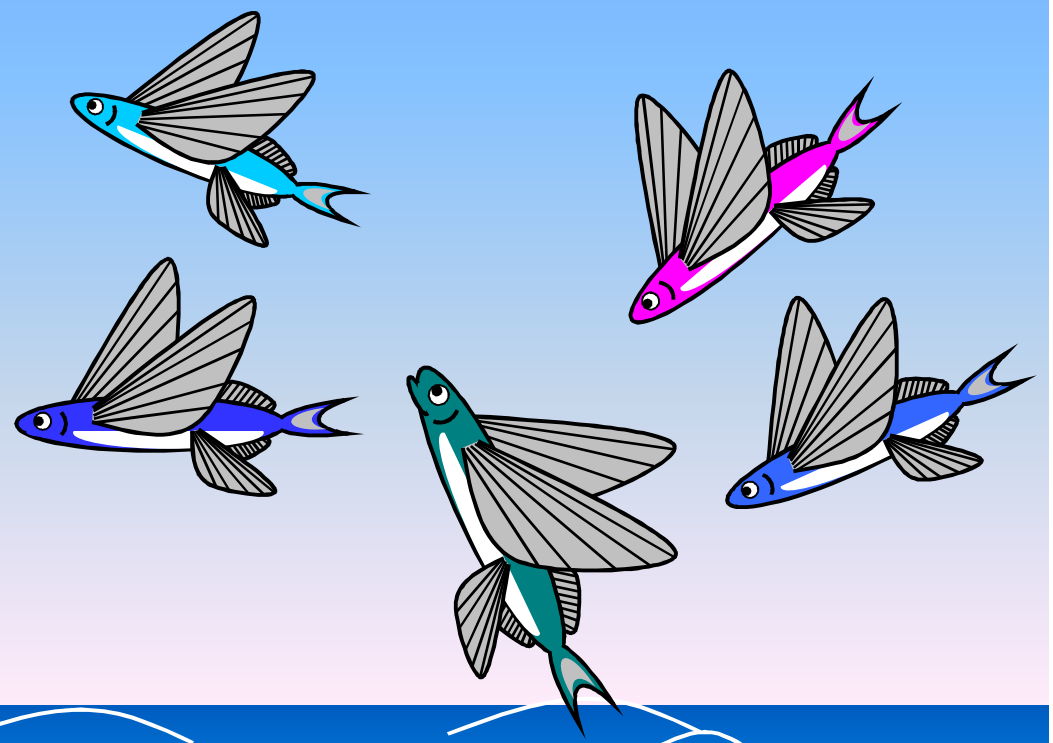
トビー　の　ぼうけん



さく・え　　幸徳環境設計

とびうおは、はるから　なつに　かけて、
すこし　きたの　うみで、うまれます。
そして、その　あきには、ようぎょに　せいちょうし、
ふゆを　すごします。
あたたかい　みなみの　うみに　いどうして、
ふゆを　すごした　ようぎょは、はるには　りっぱに
せいちょうして、はるから　なつにかけ　ふたたび
なかまとともに　きたの　うみに　いどうします。
そして、きたの　うみで　たまごを　うむと、
とびうお　たちは、しんでいきます。

この　おはなしは、
そんな　とびうおの　おはなしです。



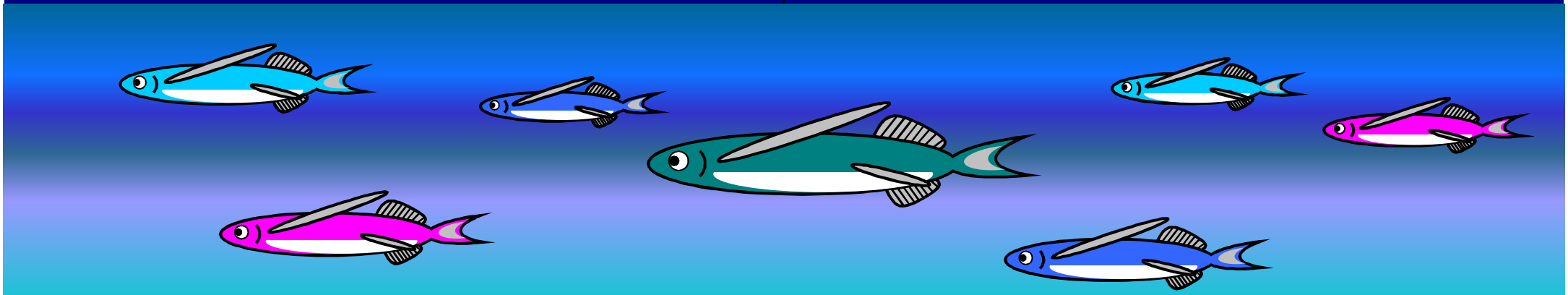
ぼくは、とびうお　の　トビー。
みんなと、いっしょに　みなみの　うみに
きてから　すこしづつ　とべるように　なってきたんだ。
いま、とぶことが　とても　たのしいんだ。
まいにち、まいにち、たくさん
とぶ　れんしゅうを　しているんだよ。

★　とびうおメモ　★
ぼくらの　なかまは、せかいで　50しゅるいくらい、
にほんの　まわりにも　30しゅるいくらい　いるんだよ。
えいごでは、フライング・フィッシュって　いうんだよ。

うみの　すいおんが　だいぶ　あたたかくなった　あるひ、ぼくらは　きたの　うみにむかった。

そして、じゅんちょうに　きたの　うみへのたびを　たのしんでいた　あるひ　のことである。

それは、かぜが　つよく　うみが　あれたひだった。



うみが　あれたひは、ぼくらは　とぶことが
できない。

だから、ひたすら　ほかの　さかなたちと
おなじように、かいちゅうを　およいでいた。

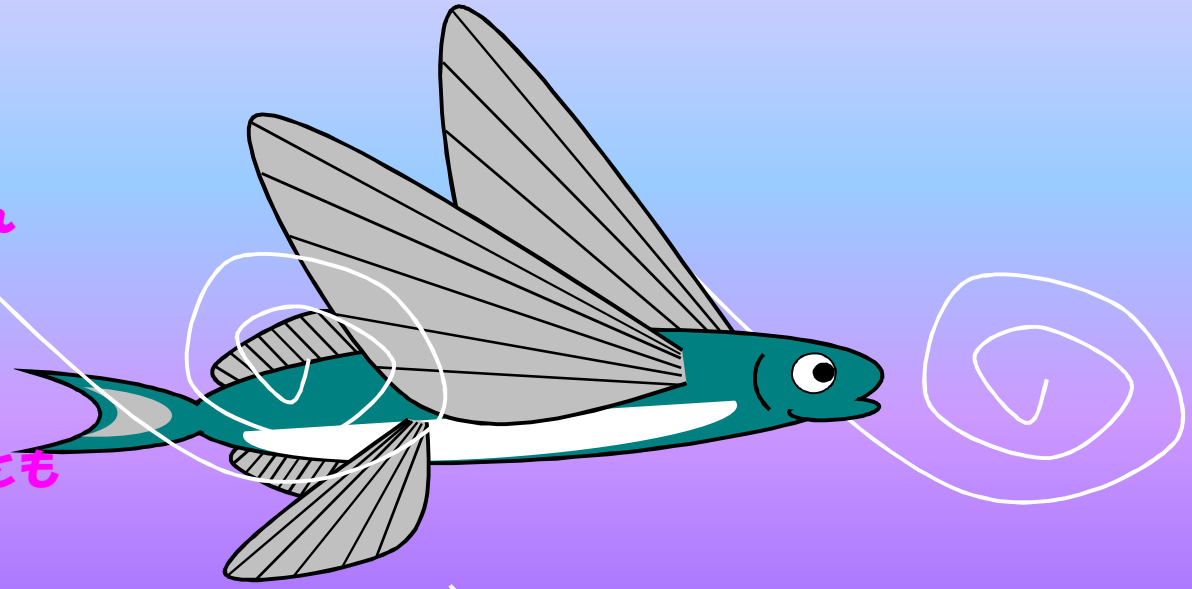
けれど、トビーは　がまんできずに
かいめんへ　とびでて　しまった。

トビーは、いつものように　とびだした。

すると、つよいかぜに　のって、ぐんぐん、ぐんぐん、ぐんぐんと、いつもより　たくさんながく　とぶことが　できた。

「なんて、きもち　いいんだろう」

トビーは、うれしくなって　なかまの　ことも　わすれて　とびつづけて　しまいました。



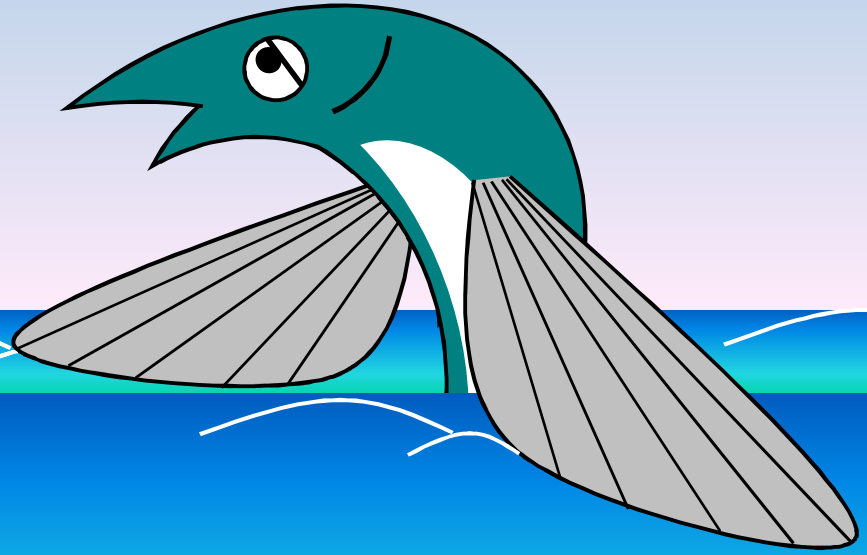
★とびうおメモ★

とびうおは、おおきな　むなびれを　いっぱいに　ひろげ、なみの　てっぺんから　とびたちます。

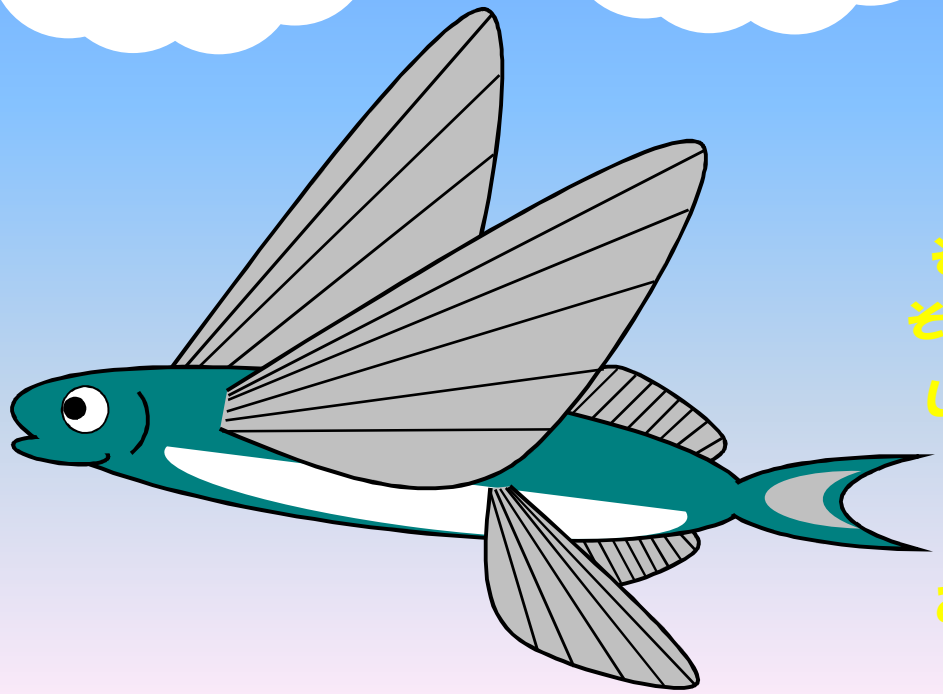
そして、かぜの　ぐあいによっては、さいだい500mぐらい　とび、じそく　60kmも　だすと　いわれています。

かぜも　やみ、きづいたときには
もう　おそく、なかまの　すがたは
みえなく　なっていました。
トビーは、なかまから　はぐれ
ひとりぼっちに、なってしまったのです。

「みんな、どこへ　いって　しまったんだろう」



トビーが、しょんぼりしていると、１わの
カモメが、とんで　きました。
「カモメさん、ぼくの　なかまを　みなかっ
「ずっと、ずっと、きたに
むかって　およいで　いたよ」
「ほんとうに？　ありがとう」



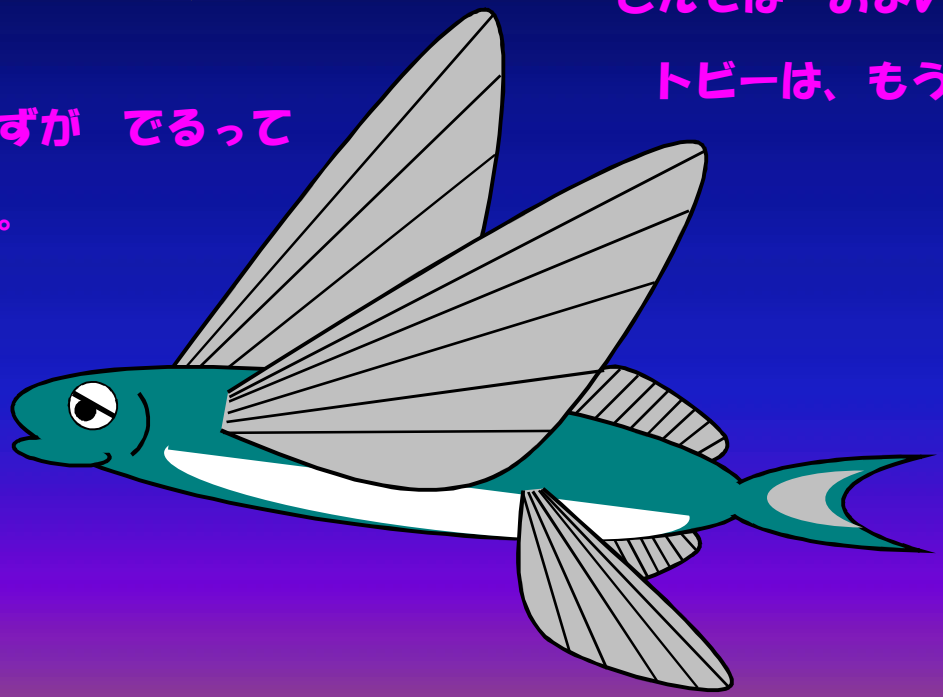
トビーは、すぐに　みんなを　おいかけ　とびだした。
しおかぜが、とても　ここちよく
かんじました。

★　とびうおメモ　★

とびうおの　せは、うみの　いろを
しています。
そして、おなかは　しろく　なっています。
それは、うえから　みたら、うみのいろと　おなじになり、
したから　みると、なみの　しぶきと　おなじ　いろ
なります。
とびうおは、そのいろの　おかげで　てきから
みを　まもることが　できるのです。

トビーは、やすむ　ことなく
およいでは　とんで、
とんでは　およいだ。
トビーは、もう　へとへとです。

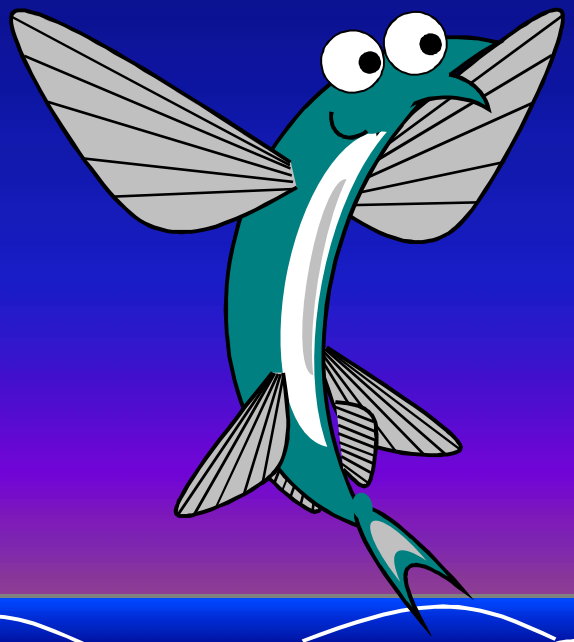
「こんなひは、うみぼうずが　でるって
きいたことが　あるな。
なんだか、こわいな」

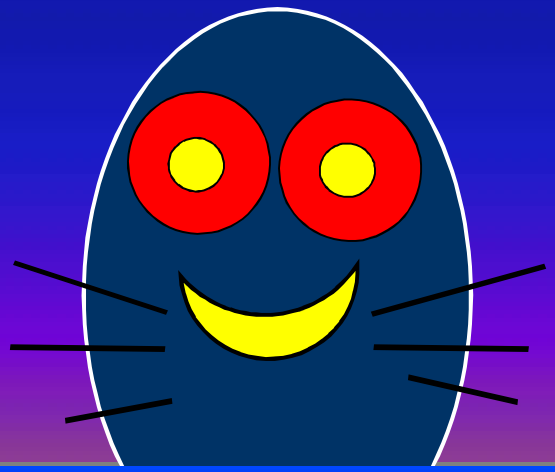


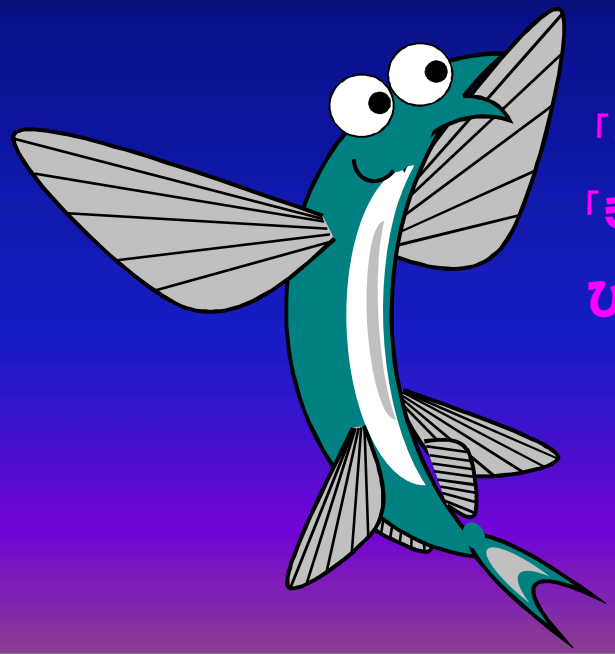
「ヒャホ、ほんとうに　でたー」

トビーは、うみぼうずに　であって　しまって

びっくり　ぎょうてんです。







「ごめんなさい」

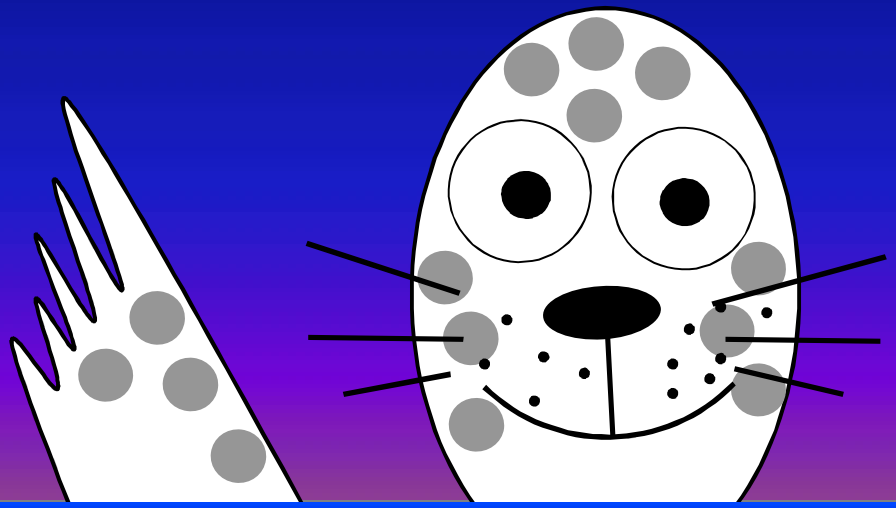
「きゅうに　でてきたんで

びっくり　しちゃったんだ」

「ぼくは、うみぼうずなんか　じゃないよ。

ごまひげあざらしの　ごま　っていうんだ。

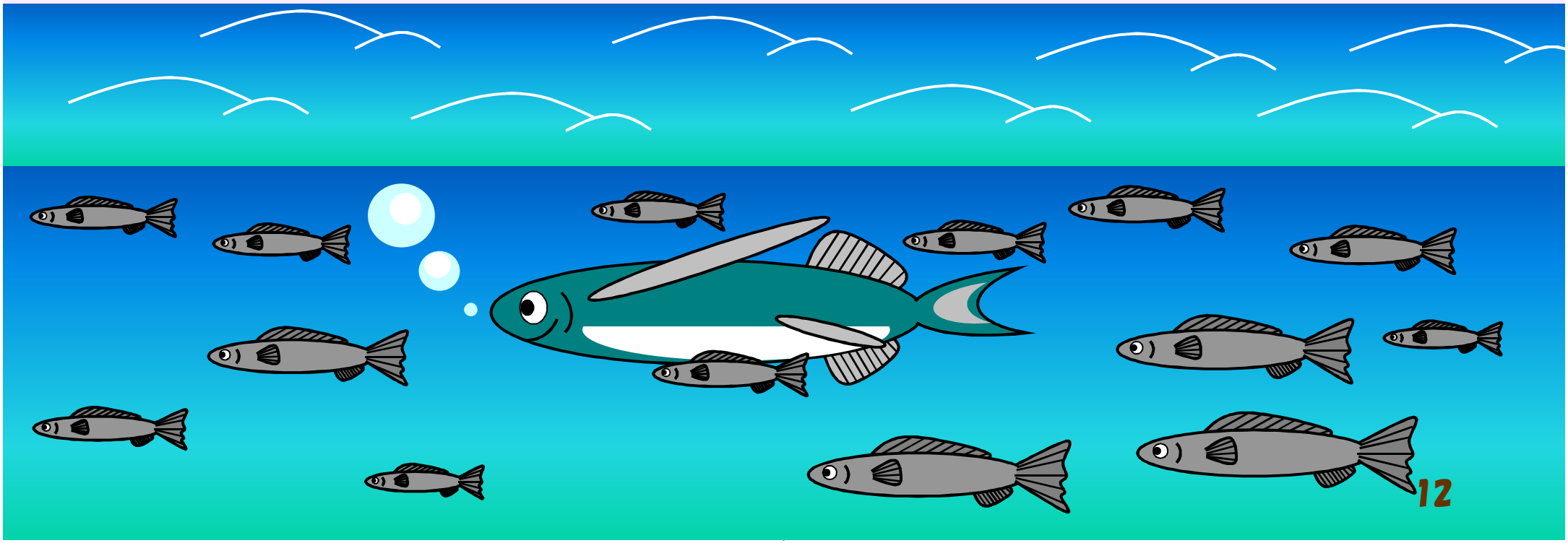
しつれいな、とびうおだな」



トビーは、いつのまにか　ねむって　しまっていた。
あさ、めが　さめると、こざかなの　むれのなかにいた。
ひさしぶりに　さかなの　むれのなかで　およいでみると、
とっても　きもちが　おちついた。

「みんな、どこまで　いくんだい。
きみたちは、なんていう
さかな　なの？」

けれど　こざかなたちは、
トビーのことなど、ぜんぜん
きにする　こともなく　およいでいます。



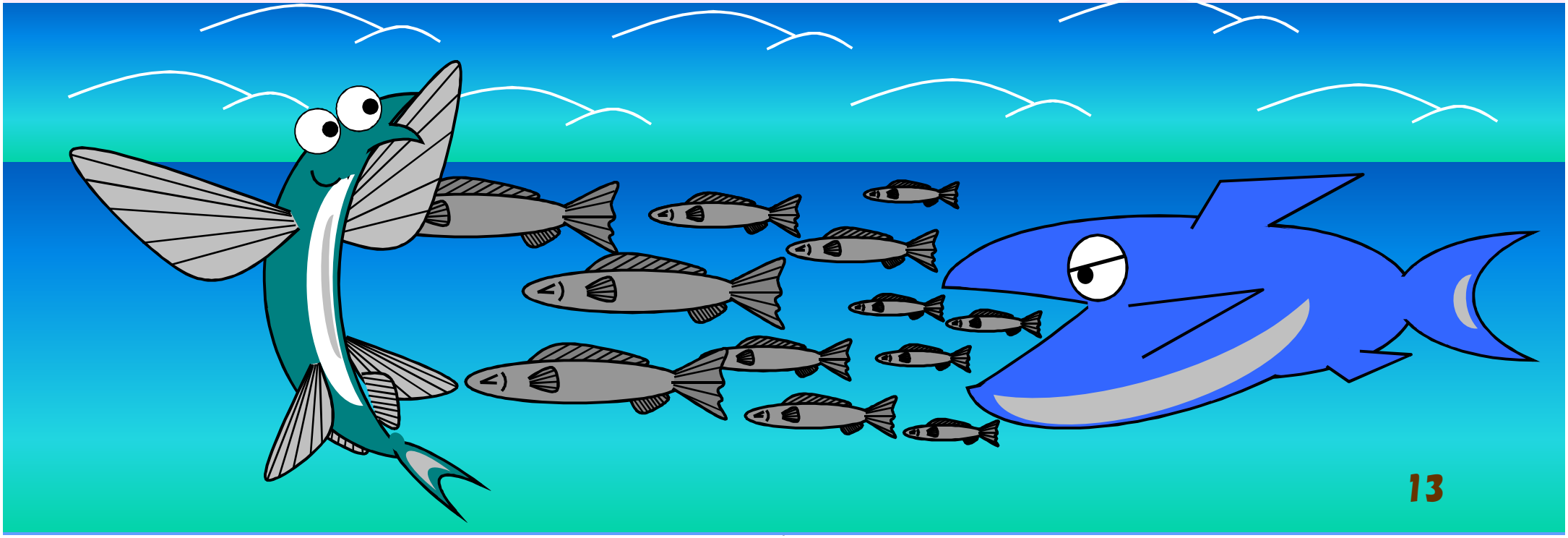
トビーは、こざかなたちとの　およぎを
しばらく　たのしんでいました。

すると、とつぜん　おおきな　くちをあけた
おおきな　さかなが、あらわれました。

そして、あっというまに、こざかなたちを
つぎつぎと　のみこんでいきました。

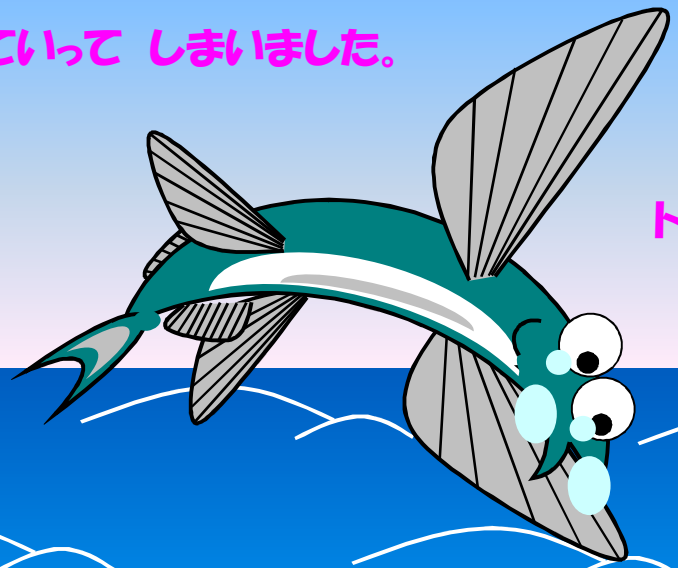
「みんな、はやく　にげなきゃ！
ぼくと　いっしょに　そらへ　にげるんだ！

トビーは、そういうと
そらへ　むかって　ジャンプしました。

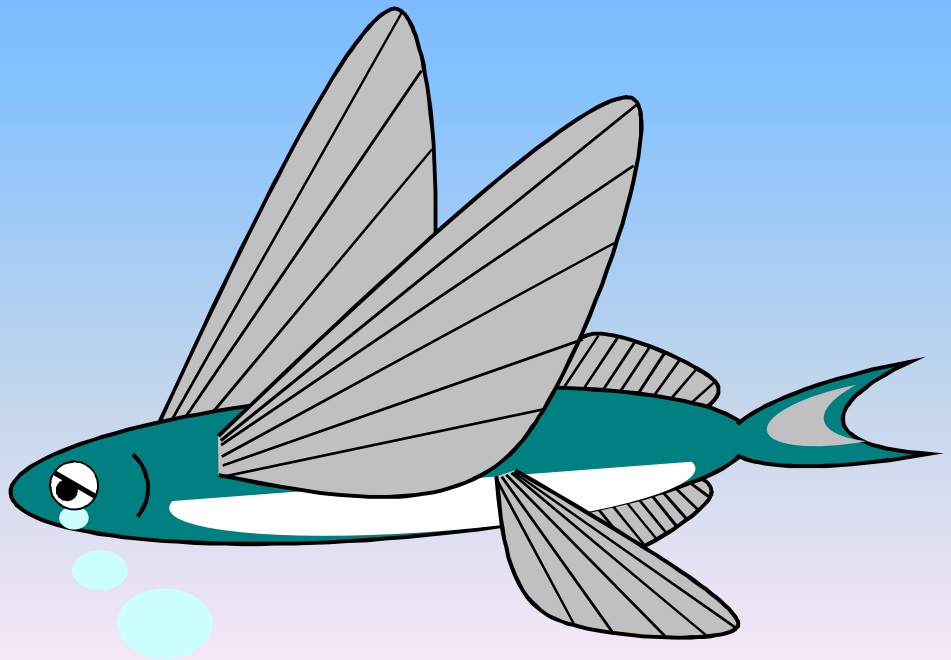


けれど トビーは、とんで にげることが
できたのですが、みんなは とぶことが できません。
つぎつぎに たべられていって しまいました。

トビーは、みているだけで なにもできません。
ただ、ただ、みている だけでした。



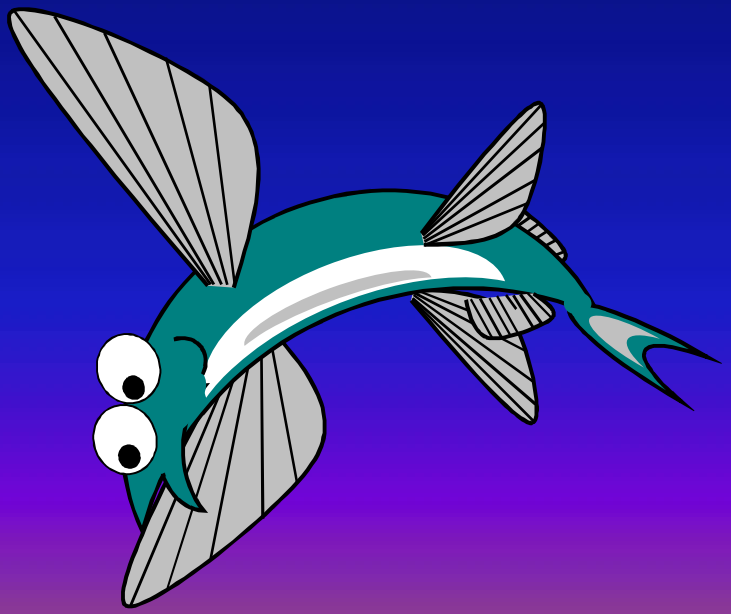
これで トビーは、また ひとりぼっちに
なってしまいました。



そして、ひとりぼっちになった トビーが、つきあかりの
まぶしい よるを とんでいると、ふしぎな ものを
みけました。

かいめんに、たくさんの ほうせきが ひかっています。

「わぁ、なんて きれいなんだろ。ほうせきが たくさん
おちているぞ」

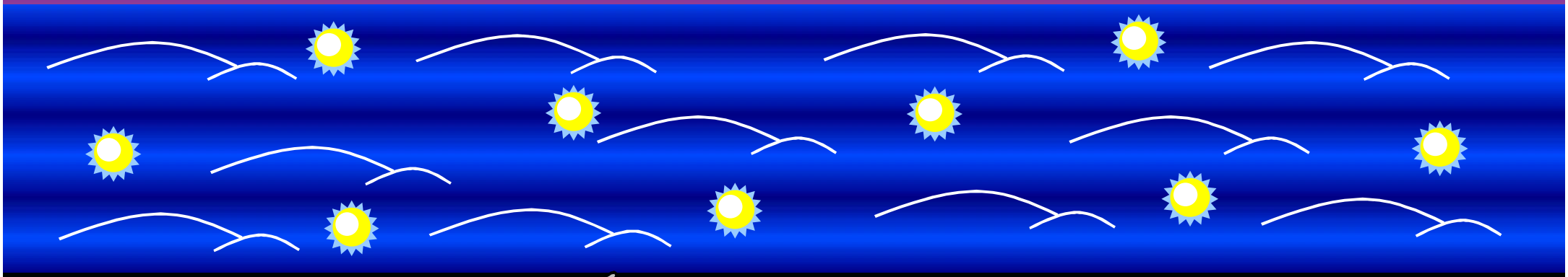


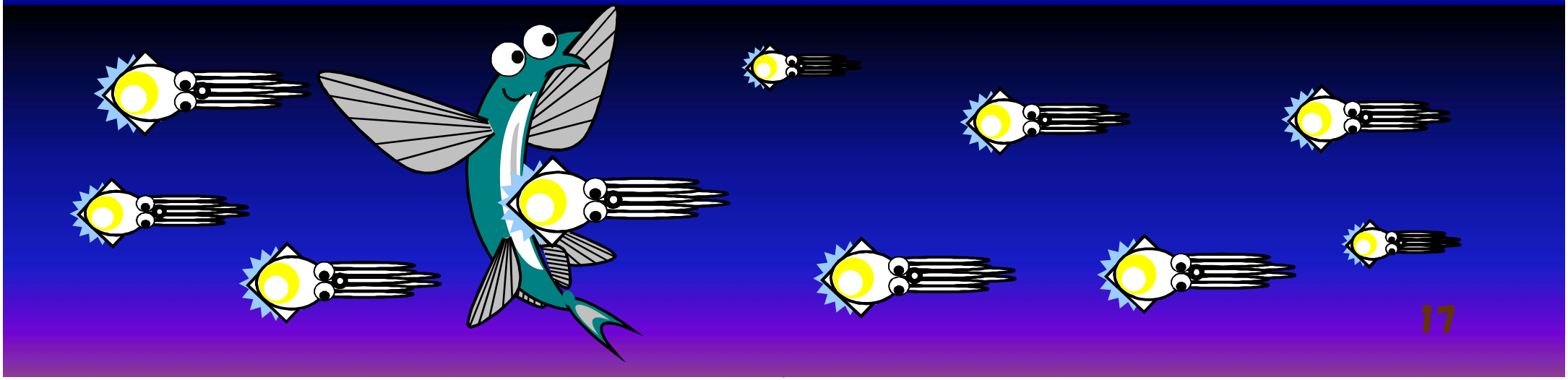
トビーが、うみに もぐってみると、
たくさんの イカたちが、およいでいたのです。

「きみたちは、なんていう イカなの？」

トビーは、じぶんの いまだしらない せかいの
ひろさを かんじ、むねが ワクワクするのでした。

「ホタルイカって、いうんだ。
そんなことも、しらないのか」





きょうは　かぜが　つよく、うみが　あれているので、

トビーは　かいちゅうを　おいでいました。

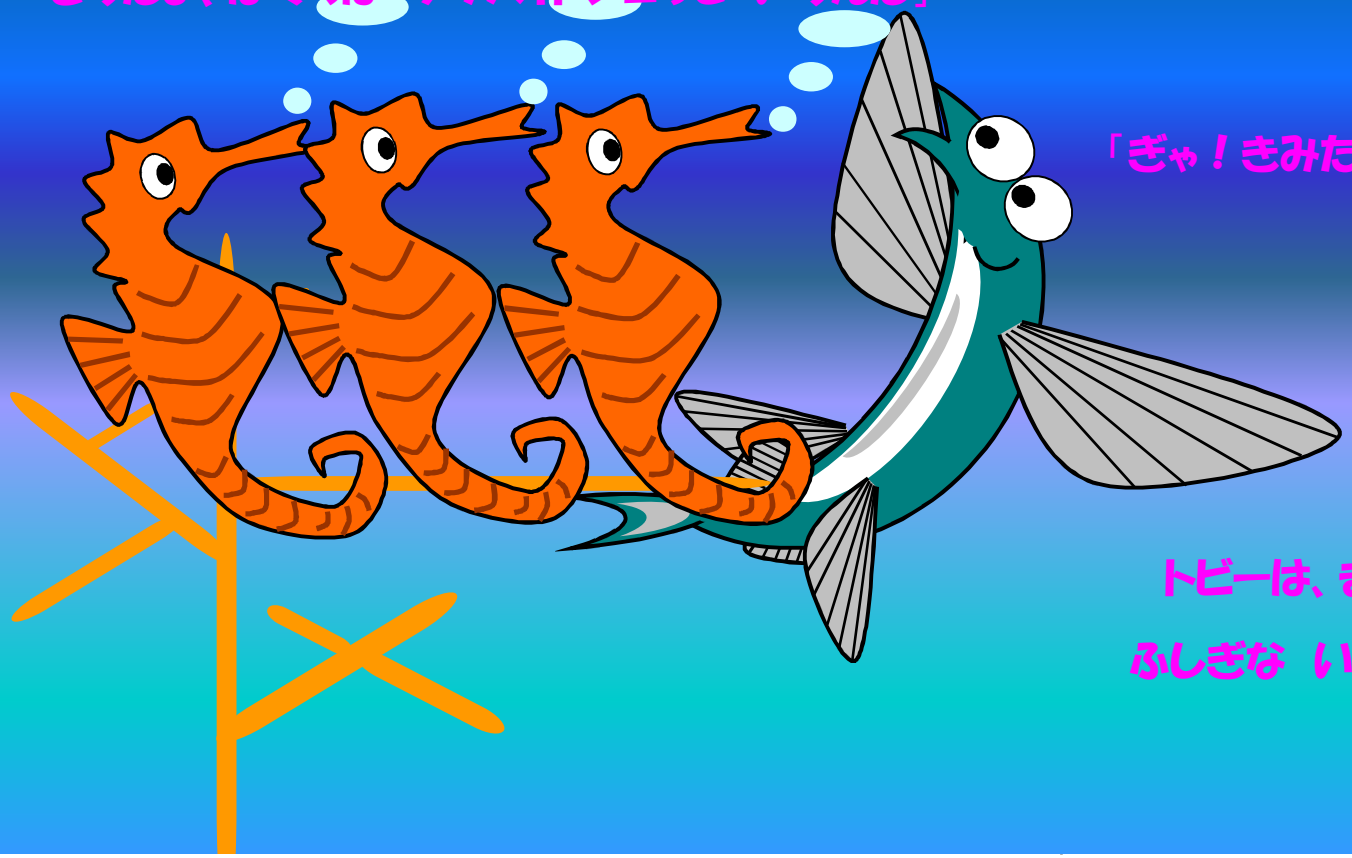
すると、ふしぎな　えだを　みつけました。

「あれ、かわった　かたちをした　えだが　あるな？」

トビーは、ちかづいて、じっと　ながめていました。

すると　どうでしょう。3つの　えだから　あわが
でてきて、おおきな　めが　あらわれました。

「そうだよ、ぼくらは　タツノオトシゴって　いうんだ」

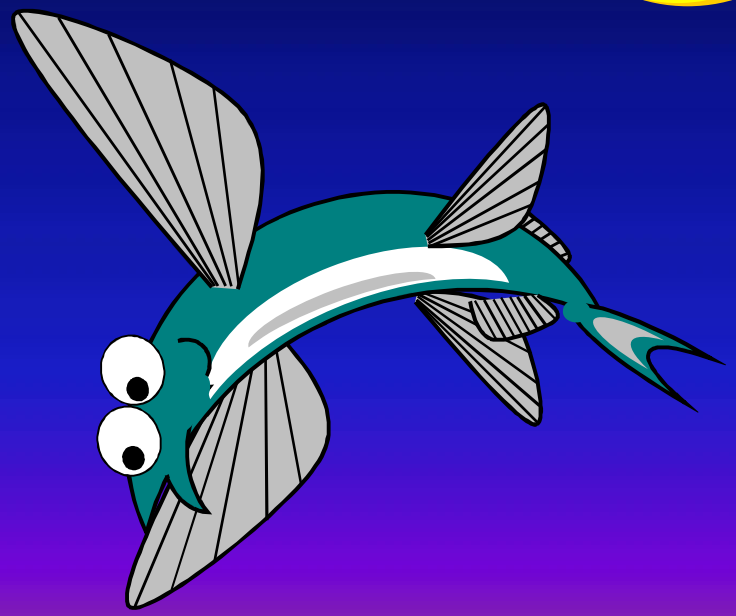


「ぎゃ！きみたち　いきもの　だったの？」

トビーは、また　ひとつ　じぶんとは　ちがう
ふしぎな　いきものと　であい、びっくりしました。

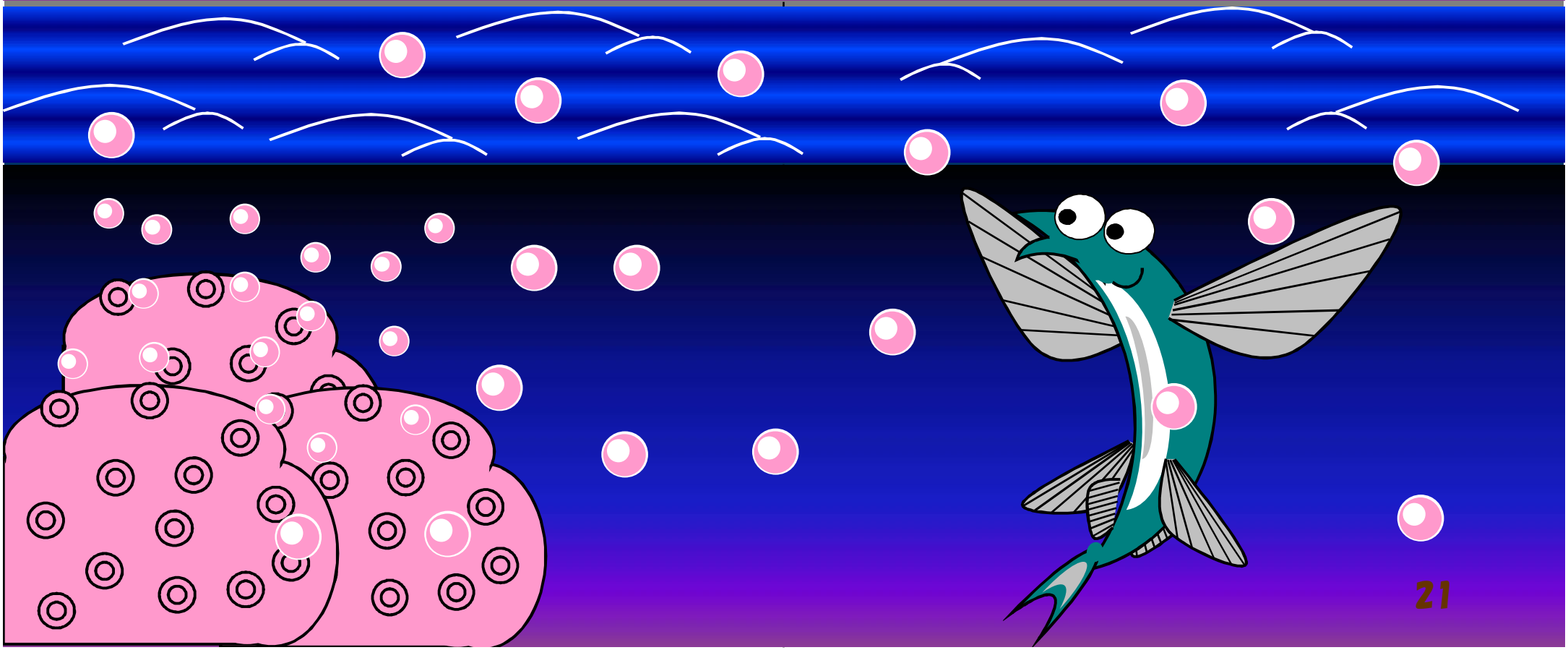
よるに　なると、かぜは　やみ、あたりいちめんを
まんげつの　ひかりが、てらしています。
トビーが、いつものように　とんでいると、
かいめんに　たくさんの　しんじゅが　あらわれました。

「あれ、しんじゅが　たくさんあるぞ、
このあいだは、ホタルイカさん　だったけど、
こんどは　なんだろう？」

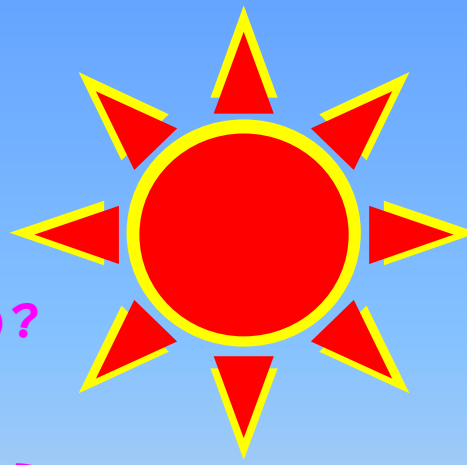


トビーが、かいちゅうに もぐってみると、
ピンクいろをした さんごから つぎつぎと
たくさんの しんじゅが とびでてきています。
それは、まるで そらに むかって とんでいく
シャボンダマの ようでした。

「うわぁ、あの さんごから
たくさんの しんじゅが でてきているぞ。
なんだか わからないけど、すごく きれいだな」

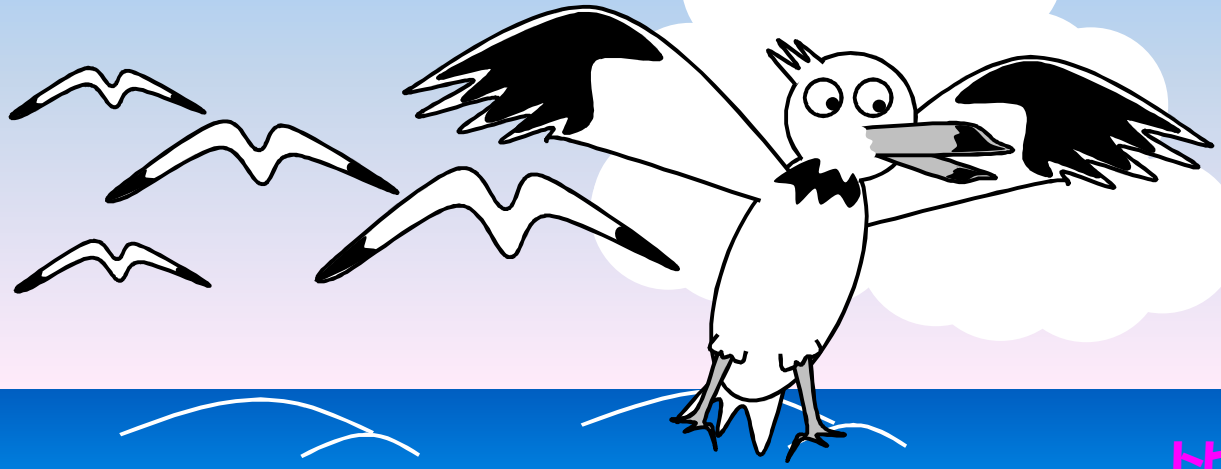


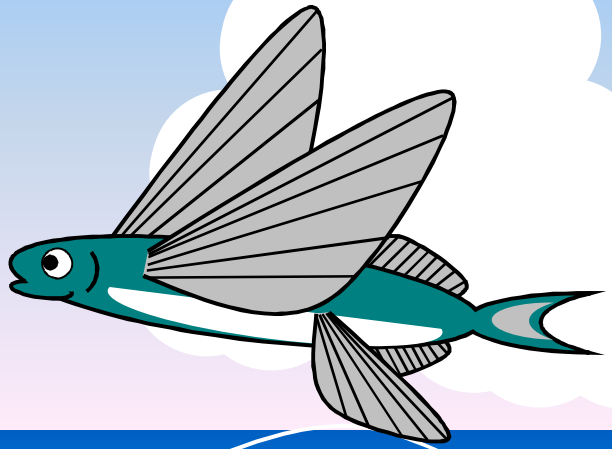
トビーは、なかまから　はなれ　ひとりぼっちに
なってしまったころは、とても　さびしかったけれど、
まいにち、まいにち、さまざまな　はっけんを
するたびに、ワクワクするのでした。



「ほんと、ほんとに　いたの？
かもめさん、わざわざ
おしえてくれて　ありがとう」

「いやぁ、トビー　ひさしぶり。きみの　なかまが、
はんにちぶんくらい　まえのきょりに　いたよ」





トビーは、なかまの　むれに、
すこしでも　はやく　おいつこうと、
いそいで、とんでいきました。

トビーが、いそいで なかまの むれに おいつこうと
とんでいると、とちゅうで とびうおの おんなのこに
であいました。

「おぼえているわ。どこへ いってたの トビー？」

「そうだったの、あえて よかったわ」

「フライじゃない、
ぼくだよ！トビーだよおぼえてる？」

「ちょっと、とびすぎちゃって みんなと
はぐれちゃったから いそいで
おいかけて きたんだ」

「フライは、どうしたの？　みんなから、はぐれたの？」

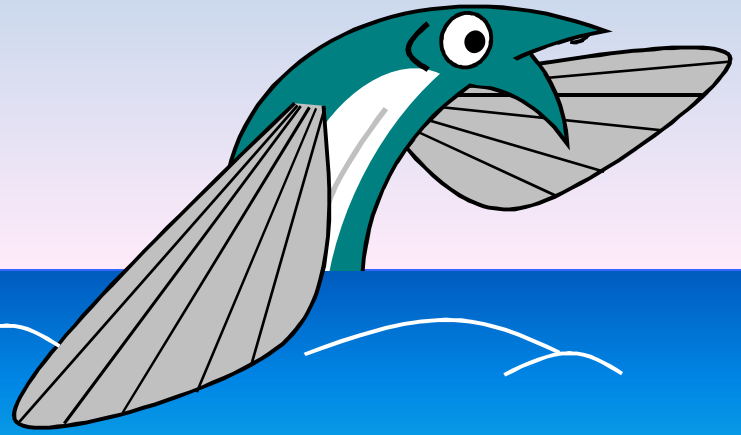
「あわてる　たびじゃ　ないから、ぼくと　いっしょに
およいで　いこうよ。もうすぐ　きたの　うみだから、
あわてなくても　おいつくよ。ねぇ、そうしよう」

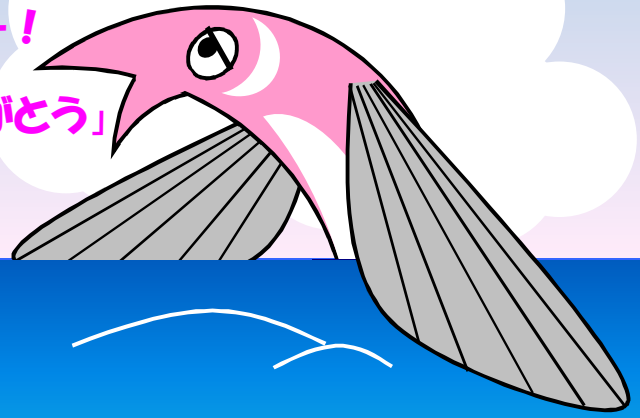
「いいに、きまってるじゃん。そうしよう。ねぇ！」

「わたし、むなびれを　けがしちゃって、
みんなに　おいていかれたの。
だから、トビーも　さきに　いって」

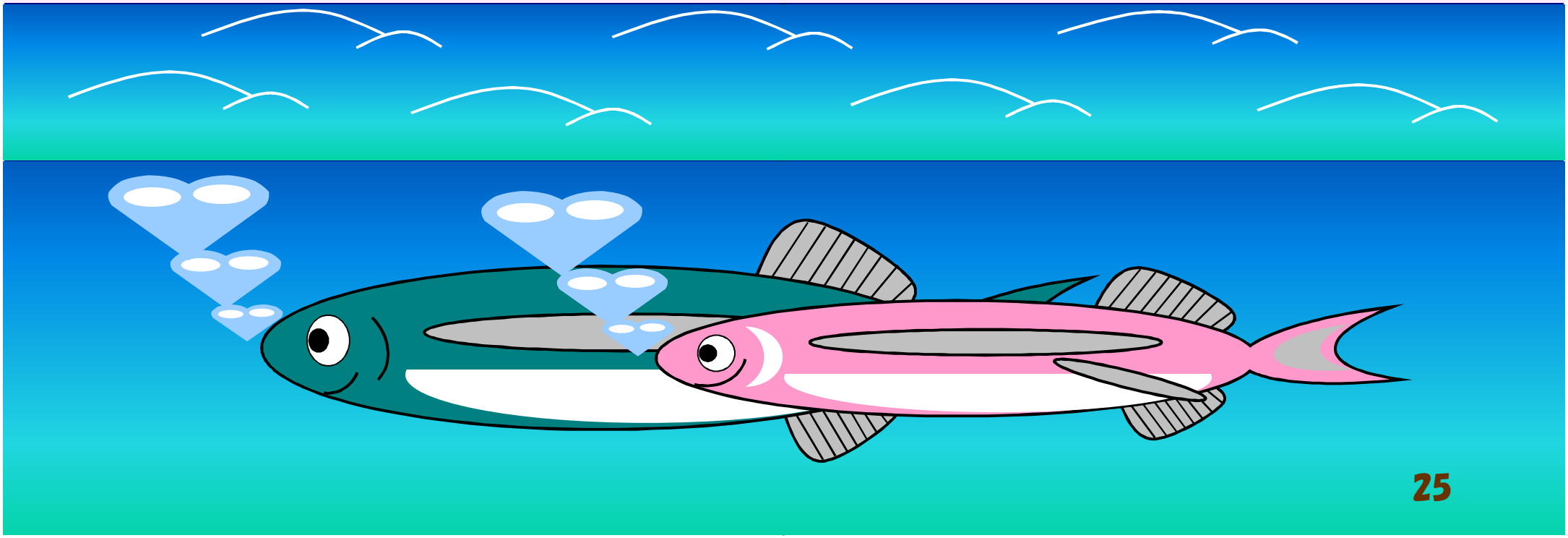
「ほんとに　いいの？
あしでまといに　なっちゃうわよ」

「ありがとう、トビー！
ほんとうに、ありがとう」





「ねぇ、フライ。ぼくね、いろいろな いきものたちを
みてきたんだ。この うみって、すごく ひろくて
ぼくら だけじゃなく、さまざまな いきものたちが
いるんだ」

「そう。トビーは、すこし
みないあいだに たくましく
なったわね。わたし、あなたに
あえて、ほんとうに しあわせ。
けがをして、とくしちゃった」

きたのうみは、もうすぐそこ。トビーと フライは、
ゆっくりと、けがを している フライのペースに
あわせて、ふたり なかよく いきました。（おわり）